

天鐘

〈2019.7.24〉

試合前の激しい雨は前触れだったのか。豪快で、鮮やかで、強烈な先制攻撃。熱い記憶がよみがえった。2011年夏から3季連続で甲子園準優勝を果たしたあの頃である▼今や屈指の強豪として全国に名をはせる八戸学院光星。戦歴でひときわ輝くのが11、12年。強打者の田村龍弘（ロツテ）や北條史也（阪神）らを擁して頂点に迫ったチームは、青森県内の高校球史で最強とも称される▼その後輩が今夏も聖地での戦いに挑む。23日の青森大会決勝では持ち前の強打を遺憾なく発揮。先輩が成し遂げられなかった、県勢の悲願である、令和になって初めての、日本一を目指す▼「今年のチームは全国制覇を狙える」。あまり強気の発言をしない仲井宗基監督が繰り返してきた。かつての黄金期、そして全国のライバルと比較しても、技術的には遜色ない。必要なのは気持ちの強さ。意識を変えようと鼓舞し続けた▼指揮官の力強い言葉とは裏腹に、歩みは必ずしも順調でなかった。昨秋の東北大会を制して春のセンバツに出場したものの、1回戦であえなく敗退。微妙に歯車が狂い始め、春の県大会は初戦敗退。屈辱のノースードから臨む勝負の夏だった▼個々の特長や役割を再確認し、チームを立て直し、ナイン一丸でもぎ取った甲子園の切符だから価値がある。まだまだ修正点はあろう。それを克服できた時に、未到の頂がはつきり見えてくる。